知られざる世界「過去編」・・・目次

１　ＵＦＯ
２　三次元テレビ
　　１　人造人間
　　２　日蓮
３　アトランティス
　　１　三度目の招待
　　２　アトランティスの教師
　　３　見学旅行
　　４　エジプトへ
　　５　アトランティスの最後
４　バビロニア
５　ベツレヘム

１　ＵＦＯ

季節の移ろいは早く、暑すぎた夏もいつの間にか去り、今は秋も深まりかなり肌寒い時節になってきた。

そのような時節に、私の心の中では相反するような思考がせめぎ合っていた。

この数年、いつ終わるともしれないこの構想は続いている。

片方の声は、頭の中でこう言う。

（金や賞賛、高い地位や名誉を放棄して人生に何の楽しみがあるのだろう。善を褒め称えて何の得になるのだろうか？物質的金銭的満足を得て、名声も得るべきである・・）

もう一方の声はこう言う。

（生命の源も自然のエネルギーも天からの恵みものなのだ。天の望みは、人間が利他業に徹し、争いも飢えも無い平等で平安な世界を作る事なのだ。だから、物質文明と利己的思想の虜になってはならない。）

ただこの葛藤は、私個人だけではないようだ。

世の中の思考も、二分化してきているようだ。

ただし外面上、私の生活は何ら変わってはいない。

名も無い一商売人として平凡な生活を送っている。

少し気になる事と言えば、進化した異星人はいる可能性がある云々の情報が多くなってきてはいる。

そしてＵＦＯの目撃事件・情報も多くはなってきている。

宇宙人のタイプも様々あるそうで、巨人タイプ、小びとタイプ、地球人タイプ等々。

地球人タイプの中には、地球人の祖先にあたる異星人がいるという話もある。

ＵＦＯ事件はこの日本でも多くなっている。

何人かの人々は、テレパシー等で円盤を呼び寄せるという。

しかし、今の私に何の力があるというのだろう。

晩秋のある日、私はいつになく早く目が覚めた。

（このさむさからすると、初雪が蝦夷富士に降るかもしれない）

私は、テラスに下りてみた。

山の頂は白く雪化粧をし、麓は霞がかかって水墨画を見るような景色が展開されていた。

気ぜわしい毎日に追われていた私は安らぎを感じると共に、何時になく感傷的な気分に浸り始めた。

そして、朝日の紅が抜けきらぬ大空に目を向けた。

私の心は、遠くに虹を期待する子供のように、まだ観ぬ何かへの憧れを抱き始めた。５分ほどじっとしていたが、やはり何事も起きなかった。

部屋に戻ろうとして後ろを振り向きかけた時、空の色彩とは異なった色が見えた様な気がした。

西の山陰からそれは動いて来た。

金属的にキラキラと輝き、時折色々な色彩を発し、霞に不思議なコントラストを添えていた。

人工美の芸術品は、自然美を汚すこと無く、音も無くぐんぐんと近づいて来た。

私は全く身動ぎ出来ず、それをただ見つめていた。

それは、あっという間にテラスの前にやって来た。

地上から５～６メートルの高さで空中に留まると、どこにも穴など見えなかった底部の真ん中辺りが丸く開いて、薄紫がかった半透明の黄泉が地上に届いた。

私がその物に気付いてから、まさに電光石火の早業であった。

白っぽいシルクのような生地の上着を着た西洋人らしき人が、金髪をなびかせながら光の柱の中から降りてきた。

人間そっくりであるが、地球人がこんな所から出てくるはずは無いと思った。

彼は地上に着くと、５～６歩こちらに歩いてきて、訛りのある日本語でこう言った。

「早くこちらに来てください、人に見られると貴方に迷惑が及びます。」

内心何かを待ち望んでいたので、心は期待で満たされたが、異常な緊張感と恐怖心も沸き起こってきた。

テラスの階段を降りようとした時、危うく足を踏み外しそうになった。

あまりに急な出来事のため我を忘れていたのか、自分の足が何処を歩いているのかわからない状態だった。

彼は、微笑みながらこう言った。

「恐れることも心配することもありません。私達はあなた方の祖先です。」

浮き足だった足で何とかそこまで行くと、彼は光の円の方へ私を案内した。

先にその光の中に入ると、全身が上方に引っ張られた。

エレベーターの場合には、先ず足が上へ持ち上げられる感じであるが、その光線の中では頭も手も足も全身が同時に引き上げられる感じなのである。

すぐ後を彼も上がってきた。

内部に引き込まれる時に上方を見たが、吸引ビームはその部屋の天井から発せられていた。

彼が私の高さまでやってくる少しの間、船の内部の空間に浮かんでいた。

彼が私の高さまでやってくると、内部の床の穴は音も無く閉じた。

いや、閉じると言うより床が現れたのである。

閉じた場所には、何処にも継ぎ目らしきものが見当らなかった。

二人は空間から床に静かに下ろされた。

この部屋をくるりと見渡すと、あまり大きくは無く何処にもドアらしき物が見当ら無かった。

ただ四方にパネルやスイッチが有るだけである。

不思議に思い彼に尋ねた。

「なぜ入り口が無いのですか？それに、今の出入り口はどの様に閉じたのですか？」

「形状記憶合金をご存じですね、あれを発展させた物なのです。この合金は、

アルミニュームよりも軽く、何倍も丈夫なのです。」

「その様な金属は地球には無いはず？」

「貴方が内心感じている様に、外宇宙からのものです。しかし、これと同じような物は一万年も前に我々の祖先が完成させていました・・当時の光子ロケットやレザースペース船は実験機の段階でしたが・・」

彼は有るパネルのボタンを押した。

音も無く生殖ドアは開き、我々が通り過ぎると音も無く閉じた。

その部屋は一見すると何も無く、パネルとボタンだけの部屋のようだった。

よく見ると、床に３メートル四方くらいのパネル状のものが置いてあった。

そしてその真上の２メートル位の低い天井にも同じような物が張り付いて有った。

私は内心思った。

（こんな物を置くだけの部屋なのだろうか？）

「いいえ、全く違います。」

彼は、私の心を読んだかのように答え始めた。

「三次元ＴＶをお見せする部屋なのです・・普通のＴＶは平面に画像を映すだけですが、このＴＶは縦横高さを持つ立体画面なのです。」

「？・・・縦横高さを持つ画面というと、現実になってしまうのでは無いか？」

「そうです、現実と同じです。違うところは、画面に手を入れると、中の物が掴めないという事です。しかも、過去ＴＶとなっています。過去の希望の場所と年代をインプットすると、その時のその場所が三次元で映し出されるのです・・・その前に、ＵＦＯを少し上空に引き上げます。１００メートルも引き上げておけば安心です。」

「その高さでは下界の人間に見えるのでは？」

「光遮蔽スクリーンをオンにします。これで如何なる方向からも見えません。」

その後私には、引き上げられる感覚は全くなかった。

２　三次元ＴＶ

一、人造人間

この何も無い空間から何かが始まるとは信じられない気がしたが、彼は微笑みながら操作を始めた。

「まず、今現在起こっている事の一つを映します・・もうこんな事が地球上では起きているのです」

・・見詰める画面が・・いや空間がだんだんと薄暗くなってゆき、やがて少し明るくなった。やや紫色の蛍光灯の明かりに照らされた長い廊下が映し出された。

白衣を着た医者か科学者と思われる五十代ぐらいの男性が二人、ひそひそと話をしながらあちら側に歩いて行く。

きれいな英国英語をうつむき加減で喋っているのだが、余り良い話題では無さそうだ。

内輪話のようにひそひそと話す様子からして分かる。

私の目に映るその場面の様子は、家の窓を通し家の外を眺める感覚そのものだった。

突然、その話が日本語との２カ国語放送になった。

（？どうしたのだろう、私の感覚が冴えたのだろうか？）

話の内容は、奇妙なものだった。

「すぐに溶液に浸しておかなければ人工皮膚が直ぐに死んでしまう。」

「それではやはり、全器官血液循環式にすべきだったという事ですか？」

「それがまた問題だ、人工心臓と人工肺は小型化に成功したが、思ってもみない問題が出てきた。」

「機能的にまだ問題があるという事ですか？」

「・・その為、言葉や目の動きに欠落がある・・脳性麻痺の患者を思わせる。」

彼らは、右側の或ドアの前で立ち止まった。

沢山の数字や記号の書かれたパネルがあり、そのボタンを１０カ所ちかくも押すとやっとドアが開いた。

直ぐにそのドアを閉じ、少し歩くと直ぐに又頑丈なドアがあった。

そこでは、光を発する小道具をとりだして、穴に光線を投げ込んだ。

そこが開くと又直ぐにそれを閉じ、今度はジュラルミン製のやや小さな部屋に達した。

そこは普通の鍵で開けると、やっと何かを覆うスクリーンが見えた。

ここまで彼らは来ると、ほっと安堵のため息をついた。

それにしても、何という念の入れ方だろうか。

一人がスクリーンの向こうに行くと、親しげに話しかけた。

「博士、まぶたと唇の調子はどうですか？」

（何だ、患者か・・でも、まぶたと唇の調子とはどういう事だろう？）

その博士は、なかなか答えなかった。

「・・・・ＦＩ・・・ＡＤ・・・」

「ＢＡＤですね、発音出来る器官は舌だけですから大変なのはよく分かります。」

ここで、もう一人がスクリーンを半分ほど開いた。

（！これは一体何だ？骸骨か、いや、それより少しましだ、まぶたと唇らしきものがある！）

私が見たものは、金属的骨組みに人工皮膚を貼り付けた人体に似た物体だった。

白衣の一人が言った。

「貴方が実験は成功だと言葉を発した時、我々は、今世紀最高の医学的成功だと思いました。暑さ、寒さ、痛み、快感の機能を付加することは将来的にも難しいという事は、あなたもおっしゃっていましたので、その点は了承されている事と思います。」

「・・あらしはいくいている・・それらけできせきら・・か、にくらいのどれいら・・」

白衣の一人が、通訳もかねてこう言った。

「私は生きている、それだけで奇跡だ・・とおっしゃるのですね、私もそう思います。しかし、肉体の奴隷だとは・・何故その様な事をおっしゃるのですか？」

後ろの白衣の一人がここで口を挟んだ。

「脳を移植し、手足の電動筋肉と脳の神経繊維の接続に成功した時は、脳医学の偉大な勝利だと思いました。脳の電気パルスを手足の人造神経に伝えて動かすことは長年の夢でした。あなたは、現代医学の偉大な勝利です。」

「ご覧になってどう感じましたか？」

私の後ろから、労るような声が聞こえてきた。

「驚いたでしょうが、今現在現実に起こっていることなのです・・ここでサイボーグの本心をテレパシーで読み取ってみましょう。」

彼は別の部屋に出て行くと、少ししてから帰ってきた。

手には野球ボールほどの大きさの石を持っていた。

それを私の眉間の辺りに置くと、ある種の生命力が注入されるような感覚を覚えた。

「この石は、宇宙エネルギーを蓄えることが出来ます。ラジュームに近い構造です。脳内の超感覚を活性化するのです・・さあ、サイボーグの顔をじっと見て下さい。」

私は言われた通りに、人造人間の顔の辺りを眺め始めた。

・・・最初私の耳には、多くのざわめきが聞こえた。

そのうち、段々とある声が形を整え始めた。

（・・苦しい！・・苦しい！・・・不治の病から目覚めた時、私はこうして生きている事に気付いた。あの時は、最高の喜びを感じた・・だが、この溶液の箱から１０分間ほど離れる事だけが私の生活範囲とは・・・家族が面会に来ることをどれ程楽しみに待ったことか・・しかし、息子と妻が私の顔を見た時、恐怖と驚きの入り交じった複雑な顔を見せた・・だが、話をしていくうちに、私だと確かに認めてくれた。

やはり家族だ・・・友人の科学者は、私ソックリの顔を創りますと言って家族を慰めていたが、顔を似せても結局同じ事だ。

牢獄に閉じ込められた私を、とても悲しんでいた。

そして、暑さ寒さを感じないこの私を、心から哀れんでいる目をしながら帰っていった。病で苦しんだ肉体の牢獄から解放された途端、サイボーグの牢獄に閉じ込められた・・・脳が死なない限り、この状態のまま永遠に生き長らえる事になるのか？・・この苦しみが永遠に続くとは、何という事か！これぞ地獄の最たるものだ・・・自らサイボーグを希望した手前、死にたいとは如何しても言えない・・・誰か、助けてくれ！）

彼の心をテレパシーで感知していた私も、耐えきれない嫌な気持ちになってきた。

「如何でしたか？・・自然の摂理を変える事は難しい事です。」

「・・ところで、先ほど突然英語が訳されて聞こえて来ましたが、如何したのでしょうか？」

「同時通訳期のスイッチを入れたのです。これは、ほとんどの言語を百聞の一秒の早さで翻訳し発生するのです・・さて、この場面はもう十分でしょう。では別の時代に参りましょう。次の事実は、我々の先祖が関係したある事件です。」

私は操作盤類をじっと見ていたが、七〇〇年余りの時を遡りダイアルをセットしたように思われた。

２　日蓮

画面は薄暗く、ぼんやりとした輪郭以外何も見えなかった。

静かに見守っていると、波の音がかすかに聞こえてきた。

じっと目を懲らすと、松の木と馬、二〇人ほどの人影が微かに見えて来た。

何本かの松明の明かりが人の動きを可能にしていた。

黒々と見える刀の鞘や服装の輪郭からして彼らは武士に間違いない。

（・・ここは日本か？・・・）

空を見上げると、曇り空らしく星も月影も見当らなかった。

人の顔の見分けもつかぬ薄暗い夜である。

突然、叫びが聞こえた。

「お聖人さまあぁぁ！」

その声は、言いようのない苦しみと悲しみに満ちていた。

ただならぬ事が起こっていると感じた。

その声の主は、若い僧侶のようだった。

無念やるかたないという容姿で、首を振りながら泣いているのである。

「泣くでない！法華経のため法のため死ねるのだ！これ程の喜びがあろうか！」

その声は凛として諭すようであり、また確信に満ちていた。

若者から４～５メートル離れた所にいる馬上の僧を私は見た。

その目を見た時、私の息が止まった。

落ち着きと威厳に満ち、見据えられた者は心の中を総て見通されてしまう様な目だった。

（・・法のために死ねる、とか言っていたが、この人が日蓮聖人？・・これから首を切られようとしているのか？・・死に際して、こんなにも超然としていられるとは、一体どういう人なのだろう？）

私は目を懲らしながら辺りをぐるりと見渡してみた。

屈強な武士たちが十人余り居り、次々と馬上から降り始めた。

そして砂場に刑場を作り始めた。

日蓮上人と思われる僧が馬上から降りると、弟子たちや信者らが近寄ってきて来た。

「お証人様！・・」とか「無念で御座います！」とか口々に叫び、その後は声にならなかった。

「とうとうその時がやって参りました。」

あの若い僧がそう言うと、泣きながらしおれるように正座した。

「法華経のために命を捧げるのだ・・何故笑ってくれぬ・・」

その声は、慰めるようにもたしなめる様にも聞こえた。

処刑場が出来上がるのをじっと見守っていた武士の指揮官らしき人が、見事な鞘を持った武士にこう命じた。

「では直重、首尾よく事を成すように・・」

直垂の膨らみをたすき掛けのように帯でまくし上げたその武士は、丁重に頷くと、上人の方を向いた。

その様子を見ると、上人は、促されるより先に、歩き始めた。

信者らの手を振り切るように、自ら海側の刑場の方に歩いて行った。

そして、こちらに背を向け砂の上にゆっくりと正座した。

瞑目しながら題目を唱え始めた。

「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経・・」

弟子らも一緒に唱和し、その響きは徐々に大きくなり、天地に響き渡り、闇夜に吸い込まれて行った。

直重と呼ばれた武士が、とうとう美しい鞘から太刀を引き抜いた。

薄暗い夜の闇の中にあっても、その冷たい切れ味が伝わってきた。

（！？まぶしい・・）

丁度その時、満月のような月が現れた・・と思った。

不意の明かりに勤行の声が途絶えた。

いや、一人だけ続けている者の声が聞こえる。

あの日蓮聖人その人だった。

皆、空を見上げた。

私も皆に倣って上方に目を懲らして見た。

その物は、右手から空中を滑るようにやって来た。

高度は不明だが、大きさは丁度満月位で、明るさもその位だった。

それが真上にやって来たときには、辺りの情景が鮮明に映し出された。

首を切ろうと武士は、良心の呵責があったのか、手のひらを返すように伏せってしまい、兵士たちの表情には、恐怖の色が有り有りと浮かんでいた。

その場から逃げ出す者、正座したり伏せたまま動かない者等、何かの仏罰を恐れておののく様子が映し出されていた。

これらの者に対して、弟子たちや信者らの様子は相反するものだった。

皆、表情がぱっと明るくなった。

仏の加護が来たと歓喜の表情を見せる者、何が起きたのか未だ事態が飲み込めない者、大きく口を開け呆然としている者など、喜びながらもこちらも様々な様子をみせていた。

皆が混沌としている中で、日蓮上人だけは、正座の姿勢を崩さず、超然と題目をとなえていた。

（上人は死を覚悟していたのか？それとも助かる事を確信していたのか？）

私にはそういった事は分からない。

しかし、超然と使命に生きるその姿は、くっきりと私の目に焼き付いた。

（百パーセントＵＦＯじゃないか？・・・直径は１００メートル位か、何てグッドタイミングで出てくるんだ！）

「ＵＦＯの内部をお見せしましょうか？」

あの宇宙人の声だった。

忘れていたが、私はＵＦＯの内部に居たのだ。

この三次元ＴＶは、如何しても現実と画面の違いを無くしてしまう。

「この船の中はまだ見ていなかった・・有り難う御座います。」と私は答えた。

彼は和やかに笑いながら「あの日蓮様を救ったＵＦＯの内部の方ですよ。」と答えた。

「え？・・やはりあれもＵＦＯだったんですね。」

「そう、二十世紀の貴方なら書籍か何かで同型の物をご覧になっているでしょう。

あの船は小型の母船で、二〇機の小型ＵＦＯを格納出来るのです。

あれは一〇〇メートル程の大きさですが、五〇〇メートル程の長さの葉巻型宇宙艇やや直径が数キロもある小惑星程の大きさの母船もあるのです。」

うーん、ＳＦみたいな話ですが、それにしても日蓮上人の首が切られそうな場面にナイスタイミングで現れましたね・・・」

「あなた方の先祖は私達の先祖でもあるのです。遠い昔、我々の先達が、地球人の寿命は、最大百年程で終わるよう遺伝子を改変したのです。

その事はにわかに信じられないかもしれませんが、人類は、長い間、知性体に見守られてきたという事だけは信じて下さい・・日蓮上人を救ったＵＦＯに三次元ＴＶのチャンネルを合わせますので、ご覧下さい。」

時間を５分前に、場所は小松原の南東の方角、高度三〇〇〇メートル上空とセットする・・と私に教えてくれた。

・・・やがて、広いコントロール室が映し出された。

二十代から三十代の操作担当者が十名ほど居り、知性とカリスマ性を漂わせる指揮官らしき人も居た。

その指揮官の隣にあるモニター画面には、松の木陰を縫って歩く十数頭の馬と馬上の人達がくっきりと映し出されていた。

このモニター機械には、何らかの方法で暗い地上を映し出す機能が付いているらしい。

その指揮官と若者の一人がじっと三次元画面を視ていた。

その若者がこう言った。

「日蓮氏の精神の波動が指揮官の精神内部に入ってきた時、さすがに貴方も驚かれましたね・・」

指揮官は言った。

「七年前にも同じような強烈な祈りの波動が私に伝わってきた。君はまだ、フリートス星の初等学校９年生だった。彼からのあの強烈なビジョンを受け取った時、月面裏側の基地に帰る途中だった・・・上人は、宇宙の実相を捉えている様だ。私は急遽、鎌倉の上空に二ヶ月も船を滞空させたのだ・・そして、日本の実情をつぶさに調査した。」

「あの時から日蓮上人を見守っている訳ですね・・」

「鎌倉時代の日本の状況から言って、国を救えるのは彼を置いて他にはいない！彼を死なせるわけにはいかないのだ・・ところで、あの船が宇宙船とはさすがに誰も気付かない様だ・・・あの上人ですら、彗星とか妖星とか呼んでいるようだ・・・この船も宇宙船であるとは気付くまい、無理も無い・・あと７００年も経たねばＵＦＯはメジャーにならないのだから。」

大使と呼ばれるこの人は、少し微笑んだ。

「ところで大使、どの様な救援策をお考えですか？」

「われわれは、月天になぞらえて呼ばれている様だ・・・確かに私は、月面基地の大使である。だから、私とこの船は確かに月の神に違いない。」

皆は大使の方を向いて、それぞれ顔を見合わせて、和やかに微笑んだ。

「この私、月天様が現れるだけで肝を冷やすに違いない。あと五分で武士は刀を抜く・・丁度そのときに、その真上を通過するように飛行せねばならない。それでも尚強行しようとするなら、光線兵器を使用しなければならないだろう。」

ここで、私の背後から声が聞こえた。

「日蓮上人というお方は、常人離れした知恵と霊能力により宇宙の実相を知っているようです。月面基地の指導者を月天、太陽の裏側にある惑星の指導者を日天、火星の基地の長老を帝釈天、この太陽系全体の庇護者を梵天様と呼んでいます。おそらく、宇宙連合組織の事も悟っているのではないでしょうか・・・」

ここで私は、質問したい感情を抑えきれなくなった。

「さっき、波動が大使の精神に入ったとか何とかおっしゃっていましたが、あれは何ですか？」

金髪の彼はこう答えた。

「我らの大使は、高い精神性と高い科学力を持っています。テレパシーや予知等の超能力を自在に駆使すると同時に、宇宙船の飛行原理や高度な宇宙科学にも精通しているのです。一方日蓮上人もレベルの高い精神性を保持しているのでしょう・・だから、波動が通じ合うのです。類は友を呼ぶと言う諺が日本にあるようですが、我々の国・・あ、それはプレアデス星団の彼方に存在する惑星の事ですが、そこにも似たような諺があります。テレパシーの波動は、実は何段階かありますが、一般に光速を遙かに超える早さで到達します。先日大使は、モニター画面を視ながら、上人と何か会話をしていました・・・あの宇宙艇を直ぐ呼び寄せるのですから、霊的位では上人の方が上かも知れませんね・・・科学知識はともかく精神性においては・・・・」

興味深い話を聞いているうちに、巨大なＵＦＯはさっきの場面の真上にやって来た。

モニターＴＶは、さっきの場面を上方から映し出していた。

私の案内者である彼はこう言った。

「さっきご覧になった場面ですので、タイムＴＶは別の場面に致しましょう。

上人はこの事件の後、本間重連宅に身を寄せますが、明日の夜もＵＦＯを滞空させねばなりません。上人が月天に験を求めるからです。あ、そうそう、大使とお話をしていた若者は私の父です。似ているでしょう。」

（？・・・あの場面は７００年も前の話の筈・・・どういう事なんだろう？・・）

「進化に伴って寿命も伸びるのです。地球人の年齢に１０を掛けて頂ければ、

大体我々の年齢が出てきます。」

「・・・あの場面の若者は２０歳で、貴方４０歳位とすると、若者は２００歳で貴方は４００歳となる？」

「大体その通りです。私は末っ子で、父が５００歳の時の子供です。私は三人兄弟ですが、フリートス星では、二人以上の子供をもうける事は希です。私は地球の西暦で言うと、１５７０年に生まれた事になります。」

「・・・どうもよく分からないですが・・・・とにかく良い事ですね。」

彼は笑いながら、こう付け足した。

「その代わり、教育期間も長いですよ。普通、最短でも７０年は勉学期間で、結婚も７０歳以降に行うよう勧告されています。勉学期間の長い人々は、２５０年位勉学と学習に回す方もいます。」

彼はどう見ても４０歳位の金髪の白人にしか見えないので、４００歳の実感は湧いてこないのである。

彼は子供を慈しむ親のような目をしながら、こう言った。

「もう時間が来ました。貴方の精神も混乱しているでしょう・・一度に多くの経験をされたので・・・」

「あ、ハイ・・」

驚くような体験ばかりだった。

生まれてこのかた初めての経験・・・心躍る気持ちと混乱と不安と、そして、・・余りに進みすぎた科学と精神性に嘆息し、今の地球がこのように進化する日は余りに先であろうという絶望感も生じた。

これが最後であろうか？という惜別感も生じてきた。

「素晴らしくも信じがたい体験でした・・あの、これが最後なのでしょうか？」

「先ほど精神の同調という話が出ましたね。貴方は気づいていませんが、我々は、理解者に成れる者、その可能性の或る者を選んでお見せしているのです。」

彼は微笑んで、最後にこう言った。

「ご安心下さい。貴方の心と生活が一段落したら、又色々なものをお見せしましょう。さらなる過去の事から、今より未来に至る事まで総て・・・」

ここで、吸引ビームの下に立つように指示された。

私の体は一度空中に保持され、足元の床が二メートル四方ほど開いた。

吸引力が少し弱められたと感じた途端、私の体はスルスルと下降を始めた。

・・・円盤の高度は、十メートル余りのようだった。下降の途中、首が左右に振れるだけ振れる範囲を見回して見たが、目撃者は、私の飼い犬だけのようだ。

余りに特異な体験の為か、吠えることを忘れてしまった様だ。

怯えるべきか驚くべきか度肝を抜かれたような表情をしているのである。

この時、私の心の中には、日蓮上人を上空から眺めた時の取り巻きの人々の様々な表情が、有り有りと浮かんでいた。

終わりに

令和４年３月１５日現在、世界はウクライナとコロナウイルスの件で席巻されている。
こういう事態は確かに試練である。
この事が収束し元の状況に戻ったなら、世界は元のように推移するのだろうか？
私の考えであるが、これはこれから起こる異変の一つに過ぎないと考えている。
さらなる異変に耐えながら生きていかねばならないとすると、我々人類は思う以上に大変な世界に生きているという事になる。こういう混沌とした時代において、この小説にこれからの厳しい時代を生きる上で何らかのプラスになるものを見出して頂けるならば幸いである。